

佐賀県内における 15 年ぶりのヤマネの生息確認

徳田 誠¹⁾・中嶋 ひかる¹⁾・木下 智章¹⁾
副島 和則²⁾・安達 修平¹⁾・白濱 祥平¹⁾・安田 雅俊³⁾

Confirmation records of the Japanese dormouse *Glirulus japonicus*
in Saga Prefecture, Kyushu, Japan

1. はじめに

ヤマネ *Glirulus japonicus* (齧歯目ヤマネ科) は本州・四国・九州・隠岐島後に分布する日本固有種である。佐賀県に分布する哺乳類では唯一の天然記念物であり、県のレッドデータで絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。本種は樹上性かつ夜行性の小型種であるため、野生個体が直接観察される機会はほとんどない(安田ら 2012)。全国的なヤマネの分布は、杉山・門脇 (2014) によって示されている。

本州の中国地方から九州にかけて生息するヤマネ個体群は、他地域の本種個体群と遺伝的に大きく離れており (Yasuda ら 2007)、ヤマネの遺伝的多様性保全の観点から重要な個体群である (安田・坂田 2011)。九州においては、中央部の九州山地に広く分布するコア個体群と7つの周辺個体群が知られており、とくに佐賀県と長崎県にまたがる多良山系に生息する個体群など4つの周辺個体群は、コア個体群から地理的に隔離され孤立した状態にあるため、保全に特に配慮する必要がある (安田・坂田 2011)。

佐賀県内においては、藤津郡太良町の標高600 m 付近で1999年11月に初めて生息が確認されたものの (鶴田ら 2001)、それ以降の本種に関する情報はなく、県内における詳細な分布域や現在の生息状況は不明である。

そこで筆者らは、県内におけるヤマネの詳細な生息状況を明らかにするため、2014年8月から多良山系や脊振山地東部 (九千部山など) に巣箱と自動撮影カメラを設置して調査を実施している。その結果、多良山系の佐賀県側において15年ぶりにヤマネの生息を確認する事ができたので報告する。

2. 調査方法

調査は巣箱と自動撮影カメラを組み合わせた巣箱自動撮影法 (安田・栗原 2009, 大野ら 2010, 坂田ら 2010, 2011, 2012, 安田・松尾 2015) により実施した。

多良山系では、多良岳の中山キャンプ場付近 (太良町大字多良中山; 標高約 500 m; 調査地 A) に2014年8月7日から、経ヶ岳の登山道沿い (鹿島市山浦本城; 標高約 500 m; 調査地 B) に2014年9月19日から、経ヶ岳山麓の鹿島市山浦柿原付近 (標高約 350 m; 調査地 C) に2014年12月15日から、それぞれ1~5台 (時期により異なる) の自動撮影カメラ (Ltl Acorn 6210, Shenzhen Ltl-Acorn Electronics または Fieldnote DUO, 麻里府商事) と巣箱を設置して、2015年6月現在も調査を継続中である。

脊振山地東部では、九千部山の山頂周辺 (鳥栖市河内町; 標高約 810 m; 調査地 D) で2014

1) 〒 840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1 佐賀大学農学部システム生態学研究室

2) 〒 840-2221 佐賀県佐賀市東与賀町大字下古賀 716-2

3) 〒 860-0862 熊本県熊本市中央区黒髪 4-11-16 森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ

年7月23日から9月26日にかけて、御手洗の滝周辺（鳥栖市立石町；標高約270～340m；調査地E）で9月26日から11月26日にかけて、それぞれ4～6台の自動撮影カメラと巣箱を設置して調査を実施した。

各調査地における調査努力量は「カメラ日」で示した。この単位は、調査に用いたカメラののべ設置日数（カメラ1台に換算した場合、何日間設置したことになるか）を示しており、例えば5台のカメラを2日間設置した場合、調査努力量は10カメラ日となる。

なお、それぞれの調査地の植生は以下の通りであった。調査地A：照葉樹林二次林（壮齢林、炭窯跡あり）、調査地B：針葉樹人工林と照葉樹林がパッチ状に存在（若齢林）、調査地C：照葉樹林二次林（若齢林、炭窯跡あり）、調査地D：落葉広葉樹と照葉樹の混交林（約100年生）、調査地E：照葉樹林（約110年生）。

3. 結果および考察

多良山系においては、調査地A（初確認日2014年8月7日；初確認までの調査努力量2カメラ日）、調査地B（初確認日2014年10月10日；初確認までの調査努力量88カメラ日）、調査地C（初確認日2014年12月19日；初確認までの調査努力量10カメラ日）のいずれの地点

においてもヤマネが撮影された（図1）。したがって、ヤマネは多良岳のみならず、経ヶ岳の周辺の比較的低標高の森林にも分布している事が明らかになった。なお、多良山系では現在も調査を継続中であり、ヤマネの撮影時間帯や撮影頻度など、詳細なデータに関しては別途報告する予定である。2015年3月までの調査においてヤマネ以外に撮影された哺乳類は、アカネズミ類 *Apodemus* spp.（齧歯目ネズミ科）、イノシシ *Sus scrofa*（鯨偶蹄目イノシシ科）、テン *Martes melampus*（食肉目イタチ科）（図2）であった。

多良山系の3地点ではいずれもカメラ設置か



図1. 自動撮影カメラで撮影されたヤマネ（鹿島市山浦柿原付近；2015年1月14日）



図2. 自動撮影カメラで撮影されたテン（鹿島市山浦柿原付近；2015年2月1日）



図3. 自動撮影カメラで撮影されたアライグマ（九千部山の山頂付近；2014年8月7日）

ら1ヵ月以内、調査努力量100カメラ日未満にヤマネが撮影されたのとは対照的に、脊振山地東部においては、調査地Dにおいて316カメラ日、調査地Eにおいて260カメラ日と、4ヵ月以上にわたり合計576カメラ日の調査を実施したにも関わらず、ヤマネは撮影されなかった。撮影された哺乳類は、アカネズミ類とイノシシ、アライグマ *Procyon lotor* (食肉目アライグマ科) (図3) であった。

今回の結果は、杉山・門脇 (2014) などが示したヤマネの分布図を支持するものであった。これまで、脊振山地においては、民間団体が佐賀市三瀬村の国有林に設置した巣箱によってヤマネが生息していた痕跡がみつかったとの報道がなされたことがあるが (日本歯科新聞, 2012年8月7日付, http://www.dentalnews.co.jp/news_details/news_details_2012.html), ヤマネ自体は確認されていない。さらに、同地において2012~2013年に実施された大規模な調査では、巣箱でみつかった巣材はどれもヤマネのものではなかった (杉山昌典, 私信)。また、2009~2011年、脊振山地の福岡県側で行われた調査でもヤマネは確認されなかった (福岡県の希少野生動物植物; http://www.fihes.pref.fukuoka.jp/kankyo/rdb/explanations/mammalian_summary)。過去の調査でも今回の調査結果でも、ヤマネの存在を示す直接的な証拠は得られていないことから、脊振山地にヤマネが生息する可能性は低いと考えられる。

安田・坂田 (2011) は、ヤマネの分布は森林の現況だけでなく土地利用の履歴に影響されていることを指摘した。おそらく、脊振山地の南北には福岡市や佐賀市といった規模の大きな都市が古くから栄えていたために森林の利用圧が高かったことに加えて、高標高地の大部分がかつて草地として利用されていたために、森林性のヤマネは個体群を存続できなかつたのであろう。これに対して、多良山系の周辺には人口が少なく、高標高地にはある程度の広さの成熟した天然林が残っている。このような高標高地の

森林は、中低標高の森林が薪炭林に利用されるなどして一時的に失われた時期に、ヤマネが個体群を維持する場所 (レフュージア) として機能したと考えられる。そして、中低標高の森林の回復にともなって、今回の調査でヤマネが確認できたような若齢の二次林にもヤマネが分散してきたのであろう。今後、中長期におけるヤマネの分散能力を検討する必要がある。

4. おわりに

近年、巣箱自動撮影法によるヤマネの生息調査が各地で行われており、これまで調査が難しかった九州でもヤマネの研究が進展しつつある (長崎県多良岳: 安田・松尾 2015, 鹿児島県大隅半島: 船越ら 2014, 安田ら 2015)。今後佐賀県内においても、さまざまな森林で巣箱自動撮影法による調査を実施し、ヤマネの生息状況と生態を把握していくことが必要である。

謝辞

本研究の実施に際し、佐賀森林管理署から国有林における調査許可を受けた。本調査の一部は、佐賀大学の地 (知) の拠点整備事業コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト平成26年度地域志向教育研究経費の助成により実施された。本調査のきっかけを与えて下さり、長崎県の子ヤマネ生息地をご案内下さった松尾公則氏、過去の脊振山地での巣箱調査に関する情報をご教示下さった筑波大学農林技術センター八ヶ岳・川上演習林の杉山昌典氏、今回の調査に協力して下さいました中原正登氏・甲斐進也氏・望岡佑佳里氏・Ayman K. Elsayed 氏、および巣箱作成にご協力下さった稲葉繁樹博士に感謝申し上げます。

引用文献

船越公威・安田雅俊・南尚志. 2014. 鹿児島県大隅半島におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の生息確認と分布. *Nature of Kagoshima*

- 40: 1-6.
- 大野愛子・安田雅俊・井上昭夫. 2010. 菊池溪谷の野生哺乳類 —吉倉・荒井(1982)の調査から30年後の状況—. 熊本野生生物研究会誌6: 1-12.
- 坂田拓司・安田雅俊・長峰智. 2010. 熊本県水俣市大川におけるニホンモモンガ *Pteromys momonga* とヤマネ *Glirulus japonicus* の確認. 熊本野生生物研究会誌6: 23-28.
- 坂田拓司・安田雅俊・中園敏之. 2011. 熊本県の樹上性齧歯類を対象とした巣箱調査と巣箱自動撮影調査. リスとムササビ26: 8-12.
- 坂田拓司・安田雅俊・中園敏之. 2012. 八代市竜峰山周辺における樹上性哺乳類の生息状況. 熊本野生生物研究会誌7: 17-24.
- 杉山昌典・門脇正史. 2014. インターネットを活用したヤマネ *Glirulus japonicus* の全国分布調査. 哺乳類科学54: 269-277.
- 鶴田靖雄・副島和則・池田憲一. 2001. 佐賀県で確認されたヤマネ. 佐賀自然史研究(7): 47-48.
- Yasuda, S. P., Minato, S., Tsuchiya, K., and Suzuki, H. 2007. Onset of cryptic variance in the Japanese dormouse *Glirulus japonicus* (Mammalia, Rodentia) in the late Tertiary, inferred from mitochondrial and nuclear DNA analysis. *Journal of Zoological Systematics and Evolutionary Research* 45: 155-162.
- 安田雅俊・栗原智昭. 2009. 自動撮影カメラで記録された宮崎県椎葉村のニホンモモンガ. 熊本野生生物研究会誌5: 31-35.
- 安田雅俊・松尾公則. 2015. 巣箱自動撮影法であきらかになった九州北部の照葉樹林におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の活動周期. 哺乳類科学55: 35-41.
- 安田雅俊・坂田拓司. 2011. 絶滅のおそれのある九州のヤマネ —過去の生息記録からみた分布と生態および保全上の課題—. 哺乳類科学51: 287-296.
- 安田雅俊・大野愛子・井上昭夫・坂田拓司. 2012. 熊本県におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の分布. 熊本野生生物研究会誌7: 25-28.
- 安田雅俊・船越公威・南尚志. 2015. 九州南部で観察された冬期におけるヤマネの活動. 哺乳類科学55: 21-25.